

地域包括ケア病棟看護師の抱える困難と課題

5階西病棟 ○小宮樹莉亜 井手口梨沙 西村みゆき 川本睦美 毛利里香 兵道真由美

【目的】2014年診療報酬改定後、新たに地域包括ケア病棟が設けられた。A病院においても地域包括ケア病棟開設後6年目を迎える。開設当初より病棟内での勉強会を通し、退院支援に関する知識の獲得やスキルアップに努めてきたが、配置転換による看護師の入れ替わりがあり、新たに配属になった看護師に対しては、既存の病棟マニュアルでの説明のみで日々の業務の中で退院支援業務を覚えてもらっている状態である。今回半構造化インタビューを通し、病棟看護師が抱える不安や戸惑いとは何かを明確にすることで、今後のやりがいや実践能力の向上に向けた取り組みへの手掛かりになるのではないかと考える。

【研究方法】1. 対象者：病棟スタッフ13名 2. 調査期間：2019年11月2日～11月30日 3. 調査方法：一部アンケート、合わせて半構造化インタビューを実施し結果カテゴリー化を行った。

【結果】地域包括ケア病棟勤務年数は、3年未満が9名と経験が浅いスタッフが多かった。配属になった時の思いは【病棟の業務に慣れない不安】【未経験な技術・看護に対する不安】【指導介入への不安】【急性期を離れることの不安】【地域包括ケア病棟勤務のやりがい】勤務中に困難に感じることには【指導介入の難しさ】【患者・家族との関わり】【退院支援・調整の難しさ】【医師との関わり】現在感じていることは【患者の病状が不安定】【退院支援介入の遅れ】【指導介入の遅れ】【急性期病棟への思い】が抽出された。

【考察】業務や技術に対する不安を抱えている看護師が多かったが、経験年数が浅く急性期病棟の経験がない看護師が半数以上であったことが影響しているのではないかと考えられる。また急性期病棟経験者は看護処置が少なくなることで、技術の低下への危機感を感じているのではないかと考えられる。【指導介入の不安】から【指導介入の難しさ】を感じていたが、現在の学習方法として、自己学習や、実際の勤務の中で先輩看護師のやり方を見て学んだという意見が多かった。地域包括ケア病棟の役割や、介護保険制度についても理解が不十分であることから、計画的な教育への取り組みの必要性を感じた。退院支援では【患者・家族の関わり】や【退院支援・調整の難しさ】から【指導介入の遅れ】や【退院支援介入の遅れ】を感じていた。宇都宮¹⁾は「入院期間が短くなっている現在、必要な医療を効果的に提供し、同時に“生活の場へ帰すこと”を医療者側も早期から意識して、そのうえで適切な医療を行うことが重要です。」と述べている。早期からのADLの改善やできるだけ入院前の状態に戻せるように介入するために【在宅の状態把握】が重要であると考え。今後【退院支援内容の充実】を図っていく中で、ベストな時期の退院につなぐためには、外来・急性期病棟から早期に関わっていくという、病院全体の退院支援の取り組みが必要であると考え。また【連携が重要】と感じる中、【医師との関わり】を困難に感じていたが、より良い退院支援に繋げるためには、医師との良い関係性を築くことが重要であると考え。今回、安定して退院していく患者と関われることでやりがいも感じており、今後、退院後訪問についても取り組んでいく必要がある。在宅に戻った患者の笑顔を見ることが出来れば、よりやりがいを感じ、モチベーション向上にもつながる。また、行った看護の評価もでき、看護の視点が広がるのではないかと考える。

【結論】1. 配属になった時【病棟に慣れない不安】【未経験な技術・看護に対する不安】【指導介入への不安】【急性期を離れることの不安】を抱いていた。2. 指導介入や退院支援の難しさから介入の遅れを感じ、スタッフへの教育支援の取り組みの必要性や、退院支援の充実を図ることが重要であると考えていた。3. 地域包括ケア病棟へのやりがいを感じていた。